

氏 名（本籍地）	益 田 幸 辰（東京都）
学 位 の 種 類	博士（社会福祉学）
報告・学位記番号	甲第412号（甲福第55号）
学位記授与の日付	平成29年3月25日
学位記授与の要件	本学学位規程第3条第1項該当
学 位 論 文 題 目	小河滋次郎の救済思想—その軌跡と特質—
論 文 審 査 委 員	主査 教授 博士（社会福祉学） 金 子 光 一 副査 教授 博士（社会福祉学） 秋 元 美 世 副査 教授 博士（社会福祉学） 稲 沢 公 一 副査 西九州大学教授 博士（社会福祉学） 古 川 孝 順 副査 東京都立大学名誉教授 小 林 良 二

【論文審査】

【論文の要旨と審査】

小河滋次郎は、社会福祉史研究でよく知られた人物の一人である。それは、監獄学から出発した感化法や感化教育において貢献したこと、また1918（大正7）年、当時の大阪府知事林市蔵のもとで大阪府方面委員制度を設計したことに起因する。方面委員制度は、民間の篤志家を名誉職として方面委員に選定し、地域の救済活動を展開するもので、その後全国に普及し、戦後、民生委員制度に引き継がれた。そのため小河に関する先行研究はきわめて豊富で、これまで柴田善守氏、遠藤興一氏、土井洋一氏、小野修三氏、倉持史朗氏などが、小河に焦点を当てた実証的な研究を行っている。

益田幸辰氏は、それら先学の研究者に多くを学びながら、若干の偏りがみられる先行研究の潮流とは異なる視点で、新たな小河滋次郎像を明らかにしようと試みた。益田氏の博士学位請求論文「小河滋次郎の救済思想—その軌跡と特質—」（以下、「本論文」）は、小河が有していた「社会公共の責務」という社会観を基軸として、監獄学研究を行っていた時期から方面委員制度創設に関わる直前までの思想の変遷を追究し、その過程を「軌跡」として示し、小河の思想の特質と先駆性を明らかにした論文である。

【論文の構成と概要】

本論文の構成は以下の通りである。

序章 研究の目的と構成

I 章 内務省時代の思想の特徴 —功利主義に基づく社会防衛—

II 章 司法省時代の思想の特徴 —社会救済における個性—

III 章 清国招聘時代の思想の特徴 —救済の目的に関する討究—

IV 章 大阪府時代の思想の特徴 —公私の役割分担—

V 章 救済思想の核としての「社会公共」

以下、各章の内容を要約する。

I 章では、まず小河が監獄学を始めることになった契機や内務省入省に至る経緯を先行研究に基づき検討し、この時期に小河が著した『監獄学』の中に、彼の救貧思想の萌芽がみられると考え、その意義を明らかにしている。そしてこの救貧思想が、内務省監獄顧問であったクルト・フォン・ゼーバツハやその恩師であるクローネ、さらに当時空知集治監教誨師であった留岡幸助などの影響によって、徐々に明確に形づくられることを論じている。

また、貧困化した出獄人に対する小河の社会観（＝「社会公共の責務」）に着目し、長く小河の思想の底流に生き続けるこの社会観がどのような経緯で小河の内面に形成されたのかを論じている。具体的には、功利主義の影響を受けていたこの時期の小河は、犯罪防止と治安維持という社会防衛のために、犯罪の主要原因である貧困を救貧組織によって解決することを考えていた。また、出獄人が社会から排斥され再犯の途を辿ることを防ぐため、彼らを保護することが「社会公共の責務」であると捉えていた。さらに本章では、明治時代の社会思想（啓蒙思想、自由民権思想、社会有機体思想、初期社会主義思想等）の中で小河がどこに位置づけられるのかを検証し、社会有機体思想および初期社会主義思想からの影響が大きかったことを明らかにしている。

II 章は、小河が個別救済の重要性を認識し始めた司法省時代に焦点を当てている。この時期の小河は、万国監獄会議などに出席するとともに、アメリカやイギリスを歴訪しており、それによって欧米諸国の慈善事業や出獄人保護の実態について学ぶ機会を得ている。特に、慈善事業ばかりではなく出獄人保護に対しても、社会の成員である宗教家や慈善家、富裕な紳士・淑女が主要な担い手であることを知り、そのことが小河の「社会公共」の考え方に大きな変化をもたらしたと論じている。

また、『未成年者ニ対スル刑事制度ノ改良ニ就テ』において、下層社会の児童を保護するために工場法と救貧制度の創設の必要性を述べていることなどを通じて、小河の救貧思想がこの時期により具体化され、明確化されたと述べている。具体的には、下層社会の児

童の個別的状況や労働を強いられている個々の児童の実態に着目し、そこからそれぞれ状況が異なる児童に対して個別にどのような保護が必要であるかという議論を展開している小河の先駆性を評価している。

Ⅲ章は、「救済の目的に関する討究」をサブ・テーマとして、小河が清国滞在期間中、自らの救済に対する考え方を見つめ直し、本来の救済の目的に対して深く探究していたことを明らかにしている。特にここでは、清国の監獄が、あたかも「官立製造場」ないし「製品陳列場」のように監獄人が製作したものを営利目的で陳列し、販路を社会に求めている状況を小河が批判している点に着目し、そこから「救済が目的であって手段ではない」という小河の理念が明確化される過程を浮き彫りにしている。そして、監獄人を働かせて利益を得るより、それぞれの監獄人を更生させ、出獄後に保護することを第一の目的とすべきであるという考え方は、小河の「公共の利益」のために「必要的最下限の程度」を尽くすべきという思想につながると論じている。また、その思想が、19世紀末にイギリスのウェッブ夫妻（Sidney and Beatrice Webb）が提唱した「ナショナルミニマムの思想」と関連するものであると捉え、その意義を検証している。

Ⅳ章は、大阪府時代の思想の特徴として、まず、小河が指導した救済事業研究会の設立経緯や概要を述べ、次に、『社会問題救恤十訓』および『救済研究』（救済事業研究会機関誌）の論稿に基づいて小河の救済思想を検討している。そしてその結果として、小河の内面でこれまで培った救貧思想と「社会公共の責務」という社会観が、救済思想という形でこの時期に昇華されたと結論づけている。

また、社会関係における救済の義務の範囲は、これまで道徳的義務とされていた「隣保相扶」の枠を超えて、広く社会の構成員を含めるべきであると小河が考えていた点を明らかにしている。さらに、小河が捉えていた「社会」の意識や観念を「社会公共」の解釈を通じて分析している。そしてそれらを踏まて、「民」（社会の一員）が「公」（おおやけ）を補完するという公私分担に関する小河の思想が、最終的に方面委員制度の基本的な考え方につながっていると論じている。

V章の「救済思想の核としての『社会公共』」は、本論文の考察にあたる章である。ここで改めて小河の救済思想に関する先学の研究を分析し、新しい視点からみた小河像を確認した上で、創設時の方面委員制度の考え方との関係について論じている。そして最後に、本論文における主要な検討結果と、「社会公共」を中核とする小河の救済思想の特質をまとめ、今後の研究に向けた課題を提示している。

【評価】

以上の益田氏の論文に対する本審査委員会の評価は次の通りである。

第1に、本論文が、これまでの社会福祉史研究で行われていた小河滋次郎に関する研究

とは異なる視点で分析し、新たな小河像を描き出している点を評価しなければならない。小河に関する研究は、これまで監獄学研究の功績と林市蔵知事のもとで行った大阪府方面委員制度の設計者としての貢献が分断されて論じられてきた傾向がある。これに対して益田氏は、「社会公共の責務」という社会観をキーワードとして、監獄学研究を行っていた時期から有していた社会観が方面委員制度の基本的な考え方につながるものであることを、思想の軌跡という形で立証している。歴史研究において先行研究で見過ごされていた視点から、史実を丁寧に拾い上げて分析していく作業は重要な意味をもつと考える。

第2に、明治末期に、小河が公的救済の重要性を主張すると同時に、公的救済のしくみだけではうまく機能しない状況を認識し、紳士・淑女など民間の力を引き出す必要性を唱えていたことを明らかにしたことは、地域における一般市民の参加が求められている今日の社会福祉の状況において示唆に富むものである。小河が用いた「社会公共」は、公共という概念が未整備であった時代に、「民」（社会の一員）が「公」（おおやけ）を補完しなければならないという考え方を示しており、それを実証的に明らかにした点で本論文を評価することができる。

第3に、小河がゼーバッハやクローネから影響を受けて身につけた監獄学の基本的な考え方は、犯罪防止や治安維持の視点に立つもので、いわゆる功利主義の思想に基づくものであった。しかしその後、それが再犯防止のための教育の必要性に発展し、個々人に対する貧困対策へとつながっていった。小河は「救済が目的であって手段ではない」と述べているが、監獄で罰を与えたり、監獄内で過酷な労働を強制したりするのではなく、個人の価値を認め、個人の救済こそが目的であるという主張を展開しており、この点に益田氏が着目したことも高く評価できる。

第4に、小河が執筆した膨大な著書、論文、エッセイ等の原書にあたり、丹念に読み込む作業を行った点を評価したい。その地道な努力の積み重ねが、これまでの解釈とは異なる新たな小河像を浮かび上がらせることができた最大の要因と考える。

このように、益田氏の論文は評価すべき点を多くもつが、同時にそこには課題も含まれており、最後にそのことにも言及しておきたい。

まず、小河の考えを忠実に読み解こうとするあまり原書からの引用が多くなってしまっている。本来であればそれらの引用を材料として自説を展開しなければならないのであるが、それが必ずしも十分にできていない。また、論文構成において、小河の職務の変遷に合わせた時代区分になっているが、それが小河の思想の特徴の変遷を正確に示すものであるかどうか必ずしも明確ではない。さらに、本論文で取り上げた小河の思想が、今日の社会福祉研究の状況を説明する上で、良い素材であり、その点から今日的な意味づけをさらに付け加えることができるにも関わらず、最終的に十分な検証ができていない。その意味で、益田氏には本論文で掲げた研究テーマの分析を継続的に行い、さらに発展させてほし

い。

【審査結果】

以上、本審査委員会における議論を要約したところであるが、委員会は厳正かつ公平な審査の結果、本論文は博士（社会福祉学）の学位を授与するに値する水準ならびに内容をもつものであるという結論に至った。また、福祉社会デザイン研究科の博士学位審査基準に照らしても本論文は妥当な研究内容であると認められる。従って、所定の試験結果と論文評価に基づき、本審査委員会は全員一致をもって益田幸辰氏の博士学位請求論文『小河滋次郎の救済思想—その軌跡と特質—』は、本学博士学位を授与するに相応しいものと判断する。